

鯨油時代の砲艦外交と人道主義

一下田密航をめぐる松陰の懇願とペリーのジレンマ

陶 徳 民

関西大学文学部教授

人文学部異文化交流研究施設第29回講演会

2015年6月9日

ペリー来航までのアメリカはまだ鯨油時代であり、日本の近海で作業にあっていた多くの捕鯨船が、石炭や淡水など物資の恒常的な補給と難破時の人道救援を必要としていました。しかし、鎖国制度下の日本は、そうした必要に対応することができませんでした。「モリソン号」事件後の批判や阿片戦争関連情報の衝撃を受け、幕府は長く実施していた「無二念打ち払い令」を「薪水給与令」に転換しましたが、問題の解決には至りませんでした。海流の関係上、難破捕鯨船の大半が北海道に漂着し、難破船員は北海道から全国唯一の開港地である長崎まで護送されることになります。しかし、長崎港へ入港できる外国船が、中国とオランダの商船に限定されていたため、アメリカの艦船は例外を除いて、そこで難破捕鯨船員を迎えることができませんでした。難破捕鯨船員は長崎でオランダ商館の商船に乗って、オランダ東インド会社本部所在のバタビア（現在のインドネシアの首都ジャカルタ）にまでいき、そこで迎えられて帰国することになっていました。従いまして、鎖国日本は人道を尊重しない国だと見なされていたのです。幕府の『墨夷應接録』におけるペリーと林大学頭の対話に、ペリーは我が国の国政が人命尊重第一と誇示し、海外に漂流した自国民の帰国さえも許さないことや、アメリカ難破捕鯨船員の救助に冷たいことなどに現れた非人道的鎖国政策を糾弾した言葉が記録されています。

実は昨年一月、私がNHKの取材班のインタビューを受けた際に、軍服姿のペリーの肖像から『墨夷應接録』中のこの人道主張の一行へとつなぐように、カメラマンが繰り返して約五分間撮りました。つまり一方では軍事的な圧力を加え、もう一方では人道主義を強調するというペリーのイメージを作り上げるために、部屋を全部暗くしてベストの角度と照明環境から撮影したのです。この場面は、私の関連の文献発見と解説を交えて、今年一月三日深夜の番組、新春スペシャル「世界へGO まるわかり幕末長州」に組み込まれ、一月四日に始まった大河ドラマ「花燃ゆ」の紹介番組として放映されました。

吉田松陰の下田密航は、基本的には「師夷之長技以制夷」（欧米の先進的軍事技術を学ぶことによって欧米を制す）という目的で起こした行動でありましたが、ある意味で、上記の背景と絡んで起きたドラマでもあったと言えます。

今日の講演では、アメリカにおける新発見史料を読み解き、松陰のペリー旗艦への乗船時間、下田獄中の嘆願書および『ペリー提督日本遠征記』などをめぐって、開国期におけるアメリカの人道

外交を考えることにしたいと思います。

(一) 万次郎の漂流と松陰の密航

一八六〇年代までは、欧米の捕鯨業が航海技術の進歩と産業革命の進行に伴って、世界的な産業となっていました。捕鯨によって作られた鯨油は、工業用の潤滑油や照明用の鯨蠟燭など、様々な目的をもって商品化されました。一回の捕鯨作業は一年か二年続いた場合もあり、ハワイから日本近海までの地域が、一つの主要な捕鯨の漁場となっていました。ある統計では、当時アメリカの捕鯨船の数は、一八四一年は五五三隻、一八四六年は七三五隻、一八五一年は五五三隻、一八五六年は六三五隻、一八六一年は五一四隻となっています。このような盛んな捕鯨業の光景について、「我らの捕鯨船隊は今日この時にも、その帆で太平洋を白く埋め尽くし、その漁業の振興は何万人ものアメリカ市民に満足と幸福を与えているといえるのではないか」とまで表現されたことがあります。そして、一八三八年からの数年間、ちょうどイギリスと清国の間で起きた阿片戦争の時、アメリカ政府が捕鯨業を支援し、危険な航路の安全化を図るための海図を作成するため、探検チームを派遣しました。よく考えると、このような動向は、フロンティア・ムーブメント（「西進運動」）や、カリフォルニアのゴールド・ラッシュなどとも重なっています。また、アメリカの「明白な天命」（これは儒教的な訳し方ですが、宿命という表現もある）という対外拡張的な精神の表れでもあると言えます。

ただし皮肉なことに、この時代はちょうど鯨油依存から石油発見の転換期に差しかかっていた。救「鯨」主と呼ばれたカナダの地質学者ゲスナー（一七九七—一八六四）という男が、石油蒸留工程の発明者として一八五〇年にアメリカで特許を取りました。そして、ペリー来航七年後の一八六一年、アメリカのペンシルベニアで油井が発見されました。これらのエネルギー産業の転換の兆しは、鯨油や灯油の価格の下落を引き起し、捕鯨業界に大きな衝撃をもたらしました。一九世紀の終わりごろになると、鯨の死骸がもはや巡回見せ物として列車に乗せられ、各地で展示されるようになります。

日本との関わりで見ますと、ジョン万次郎（中濱万次郎）の経歴がこの時代をもっともよく反映していると言えるかもしれません。

土佐出身の万次郎は、一八四一年に一五歳の時、漂着した伊豆諸島の無人島でアメリカの捕鯨船ジョン・ホーランド号の船長に救助されました。その後、その船長の故郷に行き、養子となり、色々なことを勉強します。五年後、捕鯨船員として活躍し、ハワイのホノルルやアメリカ捕鯨業の総本山であるマサチューセッツ州南東部のニューベッドフォードなどへ入港したことがあります。その後、一獲千金の夢を抱いてカリフォルニアの金鉱でも働きました。

しかし万次郎の帰国の思いは、やみがたいものでした。そのため、稼いだ資金で上陸用ボートを買って、帰国に踏み切ったのです。様々な曲折のルートを経て、一八五一年に琉球に上陸し、その後、故郷の土佐に辿りつきました。

一八五三年ペリーの一回目の来航時、幕府は万次郎を通訳に採用したかったのですが、水戸藩主徳川斉昭が次のような懸念を示しました。すなわち彼以外に英語を解する人がおらず、アメリカで教育を受けた人間が真ん中に立ち、万が一祖国を売るといったようなことがあったとしても、ほかの人には全く分からない、と心配したのです。しかし、ペリーの来航直後に、当時の「アメリカ通」として買われた万次郎は、幕府に招聘され、直参旗本となり、生地の村に因んだ「中濱」という苗

字も授かりました。その後、軍艦操練所の教授となり、一八六〇年の遣米使節団の通詞として咸臨丸に乗ってサンフランシスコに航海しました。

周知のように、脱藩志士・吉田松陰は、その先生佐久間象山から、万次郎にならって海外に行き、実力をつけて帰国すれば、祖国の海防にも貢献でき、武士の身分と俸禄も回復できるだろう、と励まされました。ある意味で、松陰の密航計画は、自主「漂流」・偽装「漂流」の形を取った秘密出国の計画で、「海外雄飛」をしてから帰国後の大活躍を狙った行動でありました。

(二)旗艦に登った松陰を尋問したウィリアムズ

ペリー来航の目的については、これまで色々な説があります。捕鯨漁の保護を目的とした説もあれば、阿片戦争で開放された中国市場への進出の中継基地・日本を確保することが主目的で、捕鯨漁の保護は口実に過ぎないという説もあります。私は、ペリー艦隊の遠征を動かしたのは複合的要因であり、当時アメリカの西進運動のカリフォルニア到達に伴って、アジア太平洋への大探検の時代に入ったことも一因であったと見ています。しかし、捕鯨漁の保護は決して口実ではなく、石油時代到来前の鯨油時代の直面した切実な課題であった、というふうに考えたいと思います。このこ



図1. 主席通訳官ウィリアムズ。樋畑翁輔筆・樋畑雪湖編「米国使節彼理提督来朝図絵」（吉田一郎発行、1931年）

とは、ペリー艦隊の首席通訳官サミュエル・ウィリアムズ（一八一二—一八八四）の日記を読めば、よく分かります。

ニューヨーク州生まれのウィリアムズは、一八三三年アメリカボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）という海外宣教団体の印刷工として中国に派遣されました。一八五三年ペリーに首席通訳官として雇われた時には、すでに香港とマカオに二〇年間の滞在歴をもち、広東語を流暢に話すことができただけでなく、『中国総論』（The Middle Kingdom）という中国の歴史や社会に関する名著の初版を刊行しています。一八三七年、他のアメリカ人宣教師たちと一緒にモリソン号に乗船し、日本の漂流民七人を帰国送還しようとしたが、浦賀と鹿児島で砲撃を受けました。当時、漂流であれ、密航であれ、キリシタン禁絶のために、一度海外に出た日本人の帰国は許されませんでした。そのため、彼は、送還できなかった若い日本人漂流民の三人か四人を自分の印刷所に雇い、日常生活のなかで若干の日本語を習得しました。

ウィリアムズは一八五二年六月の日記に、広東停泊中のペリー艦隊について次のような期待を寄せました。提督の率いる艦隊は近く日本を訪問し、アメリカの捕鯨船に人道的に対応するよう将軍に強く求めるだろう。また日本側は、鎖国政策を放棄し、自国の漂流民を迎えるべきだと言います。これによってみれば、ペリーは日本遠征で通商貿易の糸口を探るほか、確かに捕鯨業の保護をその主な使命の一つとしていました。

結局、二回にわたる日本遠征のなかで首席通訳官の役割を果たし、顕著な功績を立てたウィリアムズは、ペリーの推薦でアメリカの中国駐在使節団の秘書兼通訳となりました。一八六〇年に北京に駐在できるようになってからは、ウィリアムズは首席秘書兼通訳官を務め、前任公使の離任と後任公使の着任の間にしばしば代理公使として活躍しました。一八七七年アメリカに戻り、イエール大学の初代中国語教授やニューヨークにある聖書協会会長となり、その息子の助けを得て『中国総論』の増補版も出しました。

では、ペリーの対日交渉はなぜ、ウィリアムズという漢文に精通する通訳官を頼りにしたのでしょうか。漢文は、東アジアのラテン語として当時の諸国間の意思疎通や談判交渉に重要な役割を果たしていました。アメリカの対日開国交渉は一八四四年の米中望厦条約をベースとしているため、漢文の専門家が不可欠でした。日本側の応接掛五人がほとんど東大前身の昌平坂学問所の出身者で、その筆頭は林大学頭、すなわち林復斎でありました。なぜならば、当時の日米交渉は、交渉相手国の言語に精通する通訳人材や対策集団が欠けていたため、日本語と英語による直接交渉ではなく、口頭のやりとりはオランダ語、筆録した文面は漢語、つまりオランダ語と漢語という二つの媒介言語を介して行われるものでありました。双方にとって、最も理解しやすい、また信頼のおける言語は漢文だったのです。



図2. 広東人羅森。
前掲「米国使節彼理
提督来朝図絵」

ウィリアムズの中国語は読むことと話すことが中心であり、外交文書の作成や流麗な書道で清書する能力は持ち合わせていません。そのため、彼は中国人通訳を助手として雇いました。一回目の来航に同行する中国人通訳が、琉球（後の沖縄）滞在中、アメリカ大統領から日本皇帝宛の親書を翻訳したあと、アヘン中毒で衰弱し、日本へむけて航行する途中で死亡しました。そのためペリーは、急遽、船を上海へ派遣し、もう一人の中国人通訳を連れてきたわけです。二回目の来航に同行する中国人通訳は、ウィリアムズの右腕となり、日本側の官民のなかでも有名な広東人、羅森でありました。というのは、羅森は作詩作文が上手で書道も秀逸であるため、横浜、下田および箱館で約一千人の日本人の依頼に応じて、彼らのもってきた空白の扇面に即興的に詩文を揮毫してあげたのです。

さて、松陰の密航は、ペリーの二回目の来航中、一八五四年四月二五日（旧暦三月二八日）の早朝に決行したものでありました。旗艦ポーハタン号に登った松陰を尋問したのは、まさにこのウィリアムズであり、二人のやりとりは片言の日本語も交じっていますが、基本的には漢文による筆談でありました。話がうまくいかなかった時、松陰は紙に「羅森」と書いて、この人に会いたいと要求しましたが、ウィリアムズは、いま寝ているため会えないし、会っても仕方がない、大将（ペリーを指す）がすでに決定しており、この度はご要望に添えないが、もうすぐ両国間の交流の道が開かれるに違いないので、ご要望はきっと実現できるだろうと答えました。

松陰は後に『回顧録』の中で、自分が尋問を受けた時、ちょうど船上の鐘が鳴り、それはおよそ「七つ時」（午前三時前後）と推定したと述べています。当時日本の時間制度は極めて複雑で、主要地方の日出と日没の間の時間を割って設定しましたので、恒常的画一的なものではなく、欧米の時間制度とは食い違っていました。従って、松陰は密航を企てた時、当然、米側と何時何分はどこで会うなどと約束することができませんでした。彼の手になる候文の添え書きには、私は夜火を燃やすので、火を見たら、ただちに助けに来てください、というふうに書いたこともありました。

結局、下田湾岸、弁天島近くの伝馬船を無断借用し、ミシシッピー号、そして旗艦ポーハタン号に辿り着きました。旗艦に登った時刻について、ウィリアムズは午前二時と日記に書いていますが、精確な時間は分かりません。二〇〇九年の春、私は首都ワシントンの大学へ講演に出かけた時に、ふと思いつくことがありました。松陰自身は密航の時刻について「七つ時」であったと言っておりますが、それはいったい何時何分だったのか、もしかしてペリー側の史料に関連の記載が残ってい

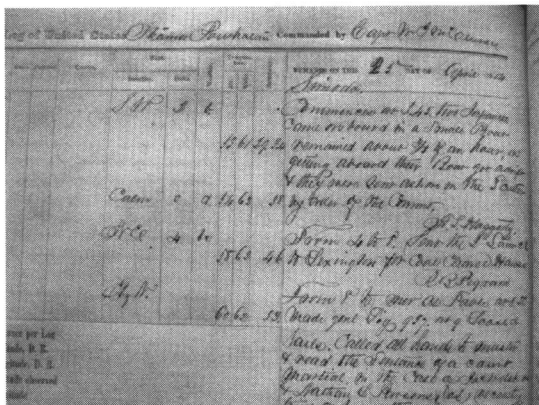


図3. ポーハタン号の航海日誌

ない、ということです。

(三) 下田獄中の松陰の嘆願書を見たペリーの人道救援

ウィリアムズは、手紙や文献を収集する癖があり、中国滞在の四三年間（ペリー随行の二年間を含む）で集めたものの数は歴大です。その息子もイエール大学教授であり、自分のものと共に全部イエール大学スターリング図書館古文書部に寄贈し、『ウィリアムズ家族文書』として保存されています。そのお蔭で、密航前に米側に渡された松陰の「投夷書」と添書き、および下田獄中で書かれた嘆願書などが、原物か原物に近い状態で見ることができます。

二〇〇三年の春、私は津田梅子に関する科研グループの一員として、同僚の藪田貫教授、大谷渡教授と一緒にアメリカで調査していた時、ついでにイエール大の『ウィリアムズ家族文書』を調べました。出てきた一



図4. 密航前の投夷書

通は、密航の前に米側に渡した嘆願書で、松陰の自筆ではなく、羅森による清書でありました。「投夷書」というタイトルは松陰が萩の野山獄中で『回顧録』を書いた時につけたものです。この「投夷書」について、私の前にも何人かの研究者がすでに発見し、論評を加えたことがあります。最初に発見したのは、沖縄出身の方でイエール大学の日本語講師を務めた山口栄鉄氏です。

この嘆願書の冒頭で松陰は「日本国江戸府の書生」と自称しています。もちろん、彼は佐久間象山について蘭学を勉強していましたたから、その意味で江戸府の書生と言っても構いません。しかし、「瓜中萬二（クワノウチマンジ）」という偽名を使いました。その偽名は、非常におもしろい

るかもしれない、と思ったのです。国立公文書館で海軍省アーカイブ中のポーハタン号の航海日誌を調べてみたら、一八五四年四月二五日に「二人の日本人が午前二時四五分に乗船してきて、その際、彼らの載ってきた小舟が流された。四五分後に提督の指示で艦の小艇で岸部に送還された」という内容の英語記事を発見しました。このことから得た教訓ですが、過去の重要事件に関連する史料は必ずしも全部なくなっているわけではなく、我々はその所在に気づいていないだけであり、もし筋の通った方向で探せば、出てくるかもしれ

ものです。実は昨日、私は萩の松陰神社に行ったのですが、そこに松陰の家紋があります。松陰は、杉家の出身ですが、後に兵学師範の吉田家を継承しました。その家紋は、輪郭がウリの断面、真ん中に卍が配されています。家紋の図柄をそのまま文字でうまく表現した偽名であるため、極めて興味深いことです。

そして、この文章の中に二度も「仁厚愛物」という儒教的な人道主義の語句が出てきます。文中の「貴大臣」とは、ペリーを指します。貴大臣と各将官、つまりペリーと彼の部下は、「仁厚愛物の意」つまり「仁愛」の心がある人である、と一旦持ち上げておき、その後、一つの賢い「仕掛け」を設けます。もし、あなた方が私達をアメリカに連れていかなければ、私たちは間違いなく追捕、斬首されることになる。そうなった場合、「貴大臣、各将官の仁厚愛物の意に傷つくこと大なり」と訴えました。これは松陰が自ら思いついたものか、それとも、「投夷書」を添削した佐久間象山の発案によるものか、分かりません。当時、松陰はまだ二五歳未満、師の象山は四四歳になっていました。現状を逆手にとって、一種の「仕掛け」を設け、「事前の警告」を行い、もし私達が殺されたら、あなた方の仁厚愛物の意、すなわち人道主義に傷がつくことになる、と訴えたわけです。

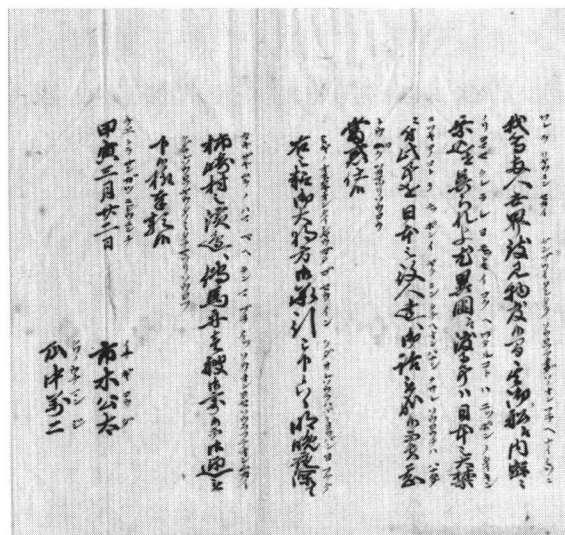


図5. 投夷書の添書き

実は米側に渡した文書には、漢文で書かれたもの以外に、和文の添え書きもありました。しかも、その文面には、全部にカタカナのルビが施されており、ぜひとも理解して欲しいという気持ちが表れています。「我等兩人、世界見物いたしたく候」、ただし異国への渡航が厳禁されているゆえ、この話が第三者に漏れることになれば、我々は大変な迷惑を蒙ることになる、と記しています。

イエール大学での調査で、私はもう一通の文書を発見しました。これは松陰が密航に失敗してから約一二日後、彼が収監された檻の横を、アメリカ艦隊の外科医が通り過ぎた時、松陰から直接、手渡された一枚の板に書いた嘆願書です。これも羅森の抄本であり、私はそれを松陰の「第二の投夷書」と名付けま

した。

この嘆願書が、密航前に渡した「投夷書」と重なっている所は、スケールの大きな願望が記されているということです。つまり、「六十国(古代や近世の六十六分国制で示す日本の範囲)を周遊するを以て未だ足らずと為し、五大州を適歴せんと欲す」と訴えています。「五大洲を適歴(わたりゆく)せんと欲す」、今風に言えば、五大大陸を周遊したい、地球を歩きたい、ということです。

私の発見によって確認できた非常に重要なことは、この文書の一行目の真ん中に出てくる「面縛就捕」という四文字の解釈の問題です。すなわち「面縛して捕に就く」の「面縛」について、ウィリアムズは、In public have we been seized and pinioned and caged many day と英訳しています。徳富蘇峰はその『吉田松陰』(一九〇八年初版)においてこの誤訳に従い、「我らは衆人の目の前において縛られ」というふうに日本語に訳しています。二〇〇二年に至るまでの約七種類の日本語訳はみな、この誤りを繰り返しているのです。しかし、松陰の原文発見によって、それは誤訳であることが分かりました。「面縛」は、中国の古典『左伝』由来の「面縛輿觀」という用語の略式表現で

あり、戦争に負けた主君が、自分を後ろ手に縛り、棺桶を台車に乗せて、勝利した君主の前に出頭し、どうぞ処罰してください、という降参の意志を示す言葉です。本当に「衆人の面前で捕縛された」場合、昼間でなければなりません。前に紹介した旗艦の航海日誌によれば、松陰は三時半に旗艦から降ろされました。各所を回って懸命に無断借用した伝馬船を捜し、その中に「投夷書」の副本など罪状に受け取られても仕方がない書類が残っていたからです。しかし未明の内に絶望して、現地の柿崎村の名主に自首しました。このような時間の流れから考えても、昼間で衆目に晒される中での捕縛ではなかったことがよく分かります。

この誤訳の問題は、原史料にあたって確認することの重要性を改めて教えてくれました。七種類の日本語訳は全て、原文の存在を知らないで訳しています。ご覧なさい、原文の周りに見えるのは、糊の跡です。この文書が、どこに張ってあったかと言いますと、ウィリアムズの自筆日記（洞富雄・日本語訳『ペリー日本遠征随行記』）のハードカバーの内側に貼り付けられ、大切に扱われていました。ただし、その息子さん、同じイエール大学の東洋史の先生でさえも、父親の日記を編集刊行した時には、その価値を全く知らず、収録しなかったのです。

私はそれ以前に、日本語訳と英語訳の両方を見たことがありしたので、この羅森の写した漢文の文書を見た途端、これだ、と気づきました。ですから、非常にラッキーな発見だったと言えます。この板きれに書かれた嘆願書を受けたアメリカ艦隊の外科医が、同日の夜ペリーに渡しましたが、ペリーは翌朝、ただちにウィリアムズと艦隊の参謀ベント大尉を派遣し、松陰を監禁した艦を視察に行かせました。しかし、松陰と従者の金子は、すでに江戸へ移されていました。この現状を知らされたペリーは、さすがに自分がその密航の要望を拒否したこの二人の運命を気かけました。つまり、本当にこの二人が斬首されることになる、事前に警告された、自分の人道主義や仁愛の心（「仁厚愛物の意」）に傷を負うことに成りかねないからです。従って、ペリーが松陰の処刑問題について関与しはじめた。ペリー艦隊は、アメリカ海軍省の派遣で、膨大な国費を使って来航しましたので、国会に報告する義務がありました。その報告書『ペリー提督日本遠征記』は三巻ありますが、その中にこの事実が記録されています。それによれば、ペリーは、最悪の処罰を避けるようにという要求を出しました。

It is a comfort to be able to add that Commodore received an assurance from the authorities upon questioning them that he need not apprehend a serious termination.

すなわち日本側から極刑は加えないという確約をとりつけ、ペリーは安心したのです。

現在、私は、この確約を下田奉行からとりつけたのか否か、という問題について追跡しているところです。この三月に関連資料を入手しましたが、まだ分析・検証するには至っておりません。それは、ニュージャージー州のラトガース大学図書館「グリフィス文庫」にある史料です。グリフィスという人物は、明治時代に来日して、最初は福井藩、後に大学南校に雇われたお雇いアメリカ人

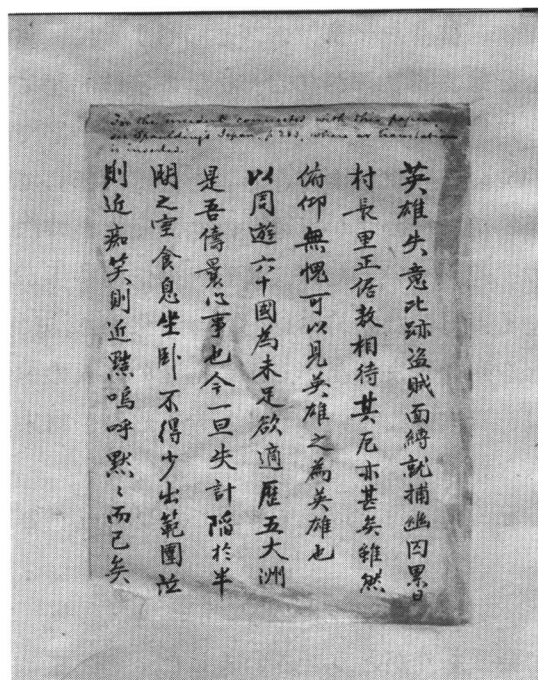


図6. 下田獄中の嘆願書

です。彼もウィリアムズと同じように、重要な資料をすべて収集保管していました。

私は、ペリーがなぜ、松陰の密航問題に関与し、極刑を処刑されないように求めたのかということに興味を持っています。ペリーの内心では、鎖国下の日本において、外部世界に大きな興味を抱いている松陰のような若者を高く評価していました。しかし、タイミングが極めて悪い、日米和親条約締結後わずか三週間ばかり過ぎた時に、もし不審者の要望に応じて、二人を船中に隠しアメリカへ連れていったら、幕府との信頼関係が壊れ、大艦隊を組んで二度も来航したことによってようやく獲得した条約締結という成果が水泡に帰してしまうという危惧があったため、助けてあげたことを断念しました。しかし、この二人の勇気ある行動を高く評価したペリーは、自分の日記の中には、日本にこういう若者がいる限り、将来、先進諸国と肩を並べて発展していく可能性がきわめて大きい、と書いています。

私の講演は、以上です。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

まだ少し時間ありますので、質疑応答ができるかと思えます。何か御質問がある方は挙手をしてください。

○私、萩往還の語り部の会という所でガイドをしている古谷と申します。先生のお話のテーマであったペリーの人命尊重とか、松陰が幕府から罪を問われないように画策をしたという人道主義的な側面は、一方で砲艦外交という語に表れているような非常に傲慢で、高圧的なペリーのイメージと、どういう関係にあるのでしょうか。つまり彼の人道主義というものが、外交の手段のような感じがしてならないんですけど、人道主義というのは本当にペリーの本心からのものだったのでしょうか。

○陶徳民講師 それは、私も考えてみたいと思っている問題です。古来の人類社会に、経済技術と軍事力の格差および宗教思想と社会体制の相違によって、国家間の矛盾、衝突ないし戦争が絶えず発生している。しかし、種族が違うとは言え、人間同士が通底して共有するものなかに、人道主義（儒教の言葉でいえば「惻隱の心」）の側面があることもまた確かな事実である。その意味でペリーが、松陰の処刑問題に関与して、殺さないように求めたことは、単なる外交手段にすぎないとはいえないでしょう。条約の締結が完了したこの時点で、このような「手段」を用いて、何が要求できるのでしょうか。松陰の「投夷書」により、事前に警告されていたことを考えると、やはり誰もが有する他者に対する惻隱の心が動いたため、関与したと考えられます。かりにペリーが何もせず、松陰が処刑されてしまっていたら、彼はきっと後悔をしたに違いありません。

○古谷 ありがとうございました。

○司会 ほかに御質問のある方、挙手をお願いいたします。

○東アジア研究科の于海英と申します。私は「面縛」という言葉が、気にかかります。先ほど先生は、この言葉は、中国古典の中で、両手を後ろ手に縛り、目を前に向けるという意味だとおっしゃいました。しかし、「面縛」という文字は、みんなの前で縛られるという意味として理解できませんか。

○陶徳民講師 そのような意味は、古典の中にはありません。それはウィリアムズの誤訳です。嘆願書には、私は自首したにもかかわらず、虐待を受け、檻の中に入れられている、とあります。その檻というのは、底辺の面積が畳一畳、高さ一・四尺です。立つこともできない檻の中に、十数日間

入れられていました。「面縛」という語は、こういう文脈において用いられているのです。

○于海英 そうですか。ありがとうございます。

○司会 ほかに御質問のある方ございませんか。

○人文学部の高木智見です。先ほどの質問にもありました人道主義は、羅森が清書したとされる板きれの書には、「仁厚愛物」と書かれているわけですが、これはお話の中で、佐久間象山が推敲したということでしたが……。

○陶徳民講師 それは、断言できませんが、可能性が高いと思います。松陰より約二〇歳年上で経験豊富な蘭学者ですから、西洋人の心理を掴むことにもっと上手だったはずです。

○高木 いずれにしても松陰や象山の認識では、アメリカ人は、東洋の儒学的な「仁厚愛物」という言葉で表現できる考え方を持っていました。つまり、キリスト教的博愛主義みたいなものを、象山や松陰はこのように表現したのでしょうか。それとも、そのようなことではなく、人間なる存在とは、全ての他者に対して惻隠の情を感じ、分け隔てなく愛するものであるはずだという松陰や象山の主観的な願望なののでしょうか。単純化して言えば、彼等は西洋の思想に対する知識があつて、こういう表現をしたのか。それとも自らの東洋的観念に基づき、全ての人は他者に対する愛を持っており、ペリー以下のアメリカ人もそうに違いない、と考えていたのでしょうか。

○陶徳民講師 先に触れたモリソン号事件や蛮社の獄からも分かるように、あの当時の蘭学者達は外部世界に対して相当な知識を持っています。彼らは、やはり人道のことを考えていました。『墨夷應接録』によれば、ペリーは、我国は人命を重んずると強調すると同時に、米国の難破捕鯨船員の救助について冷淡であること、自国の漂流民の祖国帰還を許さないこと、この二つを鎖国政策下の日本の非人道的な側面の象徴と捉え、糾弾していたのです。一八四〇年代のシカゴとかニューヨークの新聞は、捕鯨船が難破するたびに、このような日本糾弾の記事を掲載し、報道していました。

○司会 ほかに御質問もないようですので、今回の講演会はここで終了ということにしたいと思います。陶先生、どうもありがとうございました。（拍手）

〔付記〕講演録にするにあたり原題の一部を変更した。

参考文献

- 1919 新村出「太平洋の捕鯨船と日本の開国」
- 1974 猪谷善一「日本の開国とアメリカの捕鯨業」
- 1994 森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会
- 2009 渡辺惣樹『日本開国 アメリカがペリー艦隊を派遣した本当の理由』
- 2014 ドリン著・北條正司他訳『クジラとアメリカ アメリカ捕鯨全史』

陶徳民講師の関連論文

- 「下田密航前後における松陰の西洋認識：米国に残る「投夷書」をめぐる」、『環』13号，May 2003.
- 「下田獄における第二の「投夷書」について：松陰の覚悟に対するペリーの共感」、『環』14号，July 2003.
- 「十九世紀中葉美國對日人權外交的啟示—寫在美日建交 150 周年之際—」、香港中文大学『二十一世紀』第 82 期、2004 年 4 月.

「日美建交之初一椿偷渡公案的新解讀—吉田松陰「投夷書」在耶魯大学檔案館發現—」、国立台湾大

学『東亜文明研究中心通訊』第6期、2005年1月。

“Negotiating Language in the Opening of Japan: Luo Sen’ s Journal of Perry’ s 1854 Expedition,” *Japan Review* (Kyoto: The International Center for Japanese Studies), no. 17, March 2005

「黒船のもたらした広東人旋風—羅森の実像と虚像—」神戸大学経済経営研究所『現代経営学シリーズ1』(A special multi-lingual volume of the series in honor of Professor Ronald P. Toby’ s sixtieth birthday 還暦記念), 2005年3月。

“The Stowaway’ s Dilemma: Yoshida Shōin’ s Encounter with Commodore Perry,” in *Japan and Its Worlds: Marius B. Jansen and the Internationalization of Japanese Studies*, edited by Martin Collcutt, Katō Mikio, and Ronald Toby. Tokyo: International House Press, December 2007.

「ペリーの旗艦に登った松陰の「時間」に迫る—ポウハタン号の航海日誌に見た下田密航関連記事について」、関西大学文化交渉学教育研究拠点『東アジア文化交渉研究』第3号、2010年3月。

“Turning Stone into Gold: Some Reflection on My Research about the Shoin-Perry Encounter,” *Journal of Cultural Interaction in East Asia*, No.6, 2015.